

A I の人間化と人間のロボット化

浅野^{よし}介^{ひろ}敬(良裕)

近年、囲碁でA I (人工知能) が世界チャンピオンを破ったり、自動運転が始まる等様々な分野でA I 技術が進化しています。これまではデータ計算や分類等簡単に大量の情報を速く処理するのが基本的な機能だったものが、翻訳をしたり簡単な会話をしたり、瞬時の画像認識等人間の能力のかなりの部分ができるようになってきました。

現在のA I はまだ全ての人間の知的能力ができる汎用A I ではなく、一部の特殊な能力でしかありません。しかしながら人間の仕事をする上での能力も、分業により限られた部分的な使い方をする場合が多く、また決められたことを定型的、マニュアル的に行う仕事ではA I のほうが人間より得意としています。そのためこれから10年20年の間に現在の職業の半分がなくなるとの予測も出ています。

これまでA I の進化は、人間の思考、意識、脳の活動を真似て、数学的技法によって造られてきたと言われていています。人工知能という以上、人間を真似るのは当然かもしれませんが、この場合の人間の理解は現代の科学技術の人間観を前提にしています。こうした人間観に基づいてA I は設計され、次第に人間に近づいてきました。

他方人間の側から見ると、現在の職業は生産性を上げるため、企業は業種に分かれ、また企業の中でも分業により仕事は細分化してきています。

しかしこの細分化し単純化して作業することはA I の得意とするところであり、この細分化され定型化されてきた業務がA I に替われようとしています。

また科学技術そのものも細分化されており、学校では初等教育の段階から多くの科目に分かれ、しかも日本の場合、知識の詰め込み=暗記や、理解と言うより試験の点数を上げるためのドリルによる訓練が優先されてきました。これでは表層的な理解や記憶はできるかもしれませんが、物事の深い意味や相互の関連の理解、知識の応用等は困難です。

実際学力の低下が多くの方から指摘され、中学校卒業時で教科書の内容理解を伴わない表層的な理解もできない子が3割、学力中位の高校でも半数以上が教科書の内容理解ができないという調査もあります。こうした学力に関してはすでにA I の実力は80%の生徒を超えるところまで来ているようです。

教科書を読めないということは、仕事では規則や法律、マニュアルやビジネス書類が読めないと言うことであり、本当に単純労働しかできないことになってしまいます。これは現在の教育システム、それを作ってきた科学技術そのものの問題でもあります。

工場は機械化自動化され、小売は店舗から通販ネット販売へ移行し、交通通信も大きく変化してきましたが、これまでは人間の手足、筋肉系統、感覚器官等の延長でした。A I は人間の頭脳、意識、心の領域に入ってきており、これまでとは質的に違います。

A I はまだ人間が作ったプログラムで動いていますが、A I 自身がプログラムを作り、自分の善悪の価値判断で動く時期が来るかもしれません。その時マトリックスやターミネーターの話が現実になるかもしれません。

今本当に問われているのは、人間とは何か？ どこから来たのか？ そしてどこへ行くのか？ ということかもしれません。